

ジャウフレ・リュデルの「災厄の記」

——第4歌の一解釈——

瀬戸直彦

ジャウフレ・リュデルは、マルカブリュとともに、ギレーム9世(1071-1126)に続いて12世紀の中葉に6篇あまりの作品を残した、もっとも古いトルバドゥールのひとりである。ボルドーの近くプライユの領主だったらしく、1125年ころの古文書にその名が残り、1148年の作とされるマルカブリュの詩に「海のかなたにいるジャウフレ・リュデル殿にこの詩句とメロディーを贈りたい」(PC, 293-15, vv. 37-38)とあるのが、年代設定の数少ない手掛かりとなっている。海の向こうにいる会ったことのないトリポリ伯夫人に恋をして、船旅の途上に病を得、なんとか上陸は果したものの夫人の腕のなかで息絶えた、というその短い「伝記」*vida*で後世に名を残し、ペトラルカ、スタンダール、ロスタン、ブラウニング、スウィンバーン、ハイネ、ウーラント、カルドゥッチらが、ジャウフレの「遠い恋」をモチーフに作品をものしている。

この詩人については、19世紀以来、6を数える校訂版が出ている。ラハマン法によるシュティミングの版のあと、ジャンロワの手になる、C写本を中心とはするが古典的な折衷法のテキストがあらわれた。のちにピッケンスによる、各写本におなじオーソリティを置いてテキストの流動性を重視する、画期的ではあるが使いにくい校訂が出現した。またローゼンシュタインの、各作品について最上の写本を選んで、それにベディエ流の校訂をほどこしたものの、ラハマン法のうえに文体論的基準をもくわえたキアリニの版など、さながら、校訂法の実験材料のように扱われてきたのは、奇異ともみえる。ジャウフレ・リュデルという詩人には、作品数が少なく、収録写本の数も比較的少数で、それでいて魅力的な作品が多いという事情にもとづくのかもしれない⁽¹⁾。

ここでは、その伝説を生む直接のスルスとなったらしい著名な「5月に陽のながくなるとき」で始まる歌(PC, 262-2、16写本に残る)ではなく、「夏とそして 花の咲く季節が好きだ」で始まる一篇(PC, 262-1)を解釈してみようと思う。シュティミングの校訂版以来、第4歌と称され、また「私にはうたの師匠がたくさんいる」という一行で始まる作品(PC, 262-4)とともに、CとM^{h2}の2写本のみで伝えられた詩である⁽²⁾。これだけ多くの校訂があり、また論文のかたちでじつに多数の評釈がこの作品にたいして提示されてはきたが、いまだに納得のいく読み方ができない、謎めいた作品である。

I. 作品と試訳

写本：C 214v(c-d), M^{h2} 73-74 (e 175-179)

詩節：C I II III IV V VI

M^{h2} I II III IV V VI VII VIII

詩型：Frank: 571-9: 8a 8b 8b 8a 8c 8c 8d

(a: *-itz, or*; b: *-or, itz*; c: *-en*; d: *-ais*)

I 1 Belhs m'es l'estius e'l temps floritz
 2 quan l'auzelh chanton sotz la flor,
 3 mas ieu tenc l'ivern per gensor
 4 quar mais de joy mi es cobitz;
 5 e quant hom ve son jauzimen,
 6 es ben razos e d'avinen
 7 qu'om sia plus coyndes e guays.

II 8 Er ai ieu joy e suy jauzitz
 9 e restauratz en ma valor,
 10 e non iray ja mai alhor
 11 ni non querrai autruy conquistz;
 12 qu'eras say ben az escien
 13 que selh es savis qui aten
 14 e selh es fols qui trop s'irays.

III 15 Lonc temps ai estat en dolor
 16 e de tot mon afar marritz,
 17 qu'anc no fuy tan fort endurmitz
 18 que no'm rissides de paor;
 19 mas aras vey e pes e sen
 20 que passat ai aquelh turmen,
 21 e non hi vuelh tornar ja mays.

IV 22 Mout mi tenon a gran honor
 23 totz selhs cuy ieu n'ey obeditz;
 24 quar a mon joy suy revertitz,
 25 e laus en lieys e Dieu e lhor
 26 qu'er an lur grat e lur prezen
 27 e que qu'ieu m'en anes dizen
 28 lai mi remanh e lay m'apays.

V 29 Mas per so m'en suy escharzitz,
 30 ja non creyrai lauzenjador,

31 qu'anc no fuy tan lunhatz d'amor
 32 qu'er non sia sals e gueritz;
 33 plus savis hom de mi mespren
 34 per qu'ieu sai ben az escien
 35 qu'anc fin'amor home non trays.

VI 36 Mielhs mi fora jazer vestiz
 37 que despollatz sotz cobertor,
 38 e puese vos en traire auctor:
 39 la nueyt quant ieu fuy assalhitz;
 40 totz temps s'aurai mon cor dolen,
 41 quar aissi's n'aneron rizen,
 42 qu'enquer en sospir e'n pantays.

VII 43 Mai d'una re soi error
 44 e'n estai mos cors esbaitz,
 45 que tot can lo faire'm desditz
 46 aug autrejar a la seror;
 47 e nuills hom no'n a tan de sen
 48 que puese'aver cominalmen
 49 que ves calque part non biais.

VIII 50 El mes d'abril e de pascor
 51 can l'auzel movon lurs dous critz
 52 adonex vueill mos chans si'auzitz
 53 et aprendetz lo, chantador !
 54 E sapchatz tug cominalmen
 55 qu'ie'm tenc per ricx e per manen
 56 car soi descargatz de fol fais.

I 1 夏とそして花の咲く 季節が好きだ
 2 鳥が花のもとで うたうときが
 3 しかし私には 冬のほうがいい
 4 さらなる喜びが あたえられるからだ
 5 人はその楽しみに 気づくとき
 6 よりやさしく 陽気になるのが
 7 理にかなっており 適当なのである

II 8 いまや私は喜びを得て 快活であり
 9 私の価値も 回復した
 10 他のところには けっしてもう行くまい
 11 他人の獲得物を 探すこともすまい
 12 いまやはっきりと わかっている

- 13 待つ者が 賢く
14 やたらに苛立つ者は 愚かであるということが
- Ⅲ 15 長い間 悲しみのなかにいた
16 私の状況すべてが 辛かった
17 いかに 熟睡しようとも
18 恐怖から 眼を覚まさないことはなかった
19 だが今ははっきりとわかる 感じるのだ
20 あの苦悶を 乗り越えたということが
21 二度とけっして あそこには戻りたくない
- Ⅳ 22 皆がおおいに 私を祝福してくれている
23 私はその忠告を きいた人々は全員
24 というのも私は 喜びに戻れたからだ
25 だから私は讃えるのだ 彼女も神もかれらをも
26 いまやかれらは 感謝を受け報酬も得ている
27 そしてこれから私が なにを言うにせよ
28 私はあそこにとどまり あそこで録を食むのである
- Ⅴ 29 とにかく私は そこから別れたのである
30 もう二度と 中傷屋どもは信用すまい
31 なにしろ かつてはいかに愛から遠く離れていたにしても
32 いまや私は 元気であり癒されているのであるから
33 私よりも賢い人は 道を誤る
34 だから私には はっきりとわかる
35 至純の愛は けっして人を裏切らないことが
- Ⅵ 36 掛け物の下で 裸でいるよりは
37 着物をきて横になっているほうが 私にはよい
38 皆さんに証人を 引きだすこともできる
39 私の襲われた あの夜のことだ
40 そのせいで 私の心はいつも悲しい
41 そうしておいて かれらは笑いながら行ってしまっ
42 私のほうは いまだにそれで嘆息をつき悪夢を見るからだ
- Ⅶ 43 だがひとつのことで 私は困惑し
44 驚きの気持ちを 抑えることができない
45 兄弟が私に 拒んでいることすべては
46 姉妹によって許される と聞いたからだ
47 それに誰もそれほど 分別はもっていない
48 皆が共通にもっているはずの 分別を
49 かならず どこかで迷ってしまうものである

- VIII 50 4月の復活祭のおり
 51 小鳥たちが 甘い声で鳴くころあいには
 52 だから わがうたを聞いてもらいたいと思うのだ
 53 そして歌い手たちよ それを覚えてほしい
 54 それから誰もが共通に 理解してほしい
 55 私が自分は ゆたかで満ち足りていると考えているのを
 56 なぜなら 馬鹿げた重荷は下ろしたのだから

II ミケル・デ・ラ・トール本

この作品は、CとM^{h2}という2写本によって伝えられており、前者には最後の2詩節が収録されていない（以上のテキストは、第6詩節までをCによって、第7・8詩節はM^{h2}によった。もっとも両者の読みの間に大きな相違はない）。そのために、最後の2詩節を、後世の加筆、アポクリフとみる立場もあった。

従来M^{h2}はeと呼ばれてきた。両者の関連について、かんたんに説明しておきたい。eというのは、18世紀末から19世紀初頭にかけて、ローマのバルベリニ図書館の司書であったカタロニアからの亡命者ジョアッキノ・プラ師（Don Gioacchino Pla, 1745-1817）が複数の親本から書写し、それにイタリア語訳を見開きで付した276ページの本である（Roma, Vatican, Barberini, lat. 3965）⁽³⁾。その構成は、18ページまでがイタリア語による序文とペイレ・ヴィダルの伝記、残りが70におよぶ抒情詩のアンソロジーである。プラはどの作品にもスルスをしめさなかったが、その参照できたイタリアにある写本、なかでも、今は散佚したミケル・デ・ラ・トール本（chansonnier de Miquel de la Tor）に多くを負っていると推定されるので、後世のものではあってもeが貴重な証言となっているわけである。

ミケル・デ・ラ・トール本とは何か。これは13世紀の後半に、モンペリエでこの名の人物が編んだトルバドゥールの詞華集である。その全体像は、つぎの3つの資料を校合することによってほぼ知ることができる⁽⁴⁾。

1) b写本：Roma, Vatican, Barberini, lat. 4087, fol. 9-53.

2) κ写本：Giovanni Maria Barbieri（1519-1574年）の著書 *Libro dell'arte del rimare* における引用。

3) e写本

ところが最近になって、アブルッツィ大学のマリア・カレリが、マドリッドの王立歴史図書館において、このeのモデルを発見したのである（Madrid, Biblioteca della Real Academia de la Historia, 2 Ms 26）。M^{h2}と呼ばれることになったこの写本は、18世紀に書写された84ページの紙によるもので、50ページまでがペイレ・ヴィダルの伝記3篇とその作品30、51ページから終わりまでがジャウフレ・リュデル、ソルデルなど13詩人の34作品を含む。しかも、それらのうちの多く

が2つの版をそのまま載せている。これらは、カレリによれば、M写本（あるいはそのコピーである g^1 、 g^2 ）とミケル・デ・ラ・トール本そのままであり、それぞれの部分を g^3 と b^3 と名付ける。この b^3 から、もとの13世紀の詞華集のうち45作品と3つの伝記が復原できるという⁽⁵⁾。eとの相違は、 M^{h2} がeにない2作品を含むうえ、eは書写のさいにスルスを混淆して、ジョアッキノ・プラナりのいわば校訂版となっているのにたいして、 M^{h2} の方はエディシオン・ディプロマティックの体で、スルスを改変せず写しているらしいことにある⁽⁶⁾。資料としての価値がどちらに高いかはあきらかであろう。

ジャウフレ・リュデルについて述べれば、eも M^{h2} も、現存するすべての作品を提供し、後者が2つの版を掲載している2篇（PC, 262-6, 262-5）は、eが混淆してしまったもの形（M写本とミケル本によるもの）を提供してくれる。われわれの解釈する作品は、残念ながらミケル本の版だけで残ったのだが、つぎの7か所において、プラが手を入れたか、あるいは書写を誤った点か、カレリによるその復刻と、eのロンコロニ＝アルレッタスによる校訂を比較すると判明する⁽⁷⁾：v.13: soe e] sel M^{h2} ; v. 25: leis] lieis; v. 27 manque] E que queieu manes dizen; v. 34: ad essien] az essien; v. 39: assailliz] asailliz; v. 43: Mais] Mai; v. 55: Qui'm] Quiem。

第7・8詩節はeのみに収録されているという理由で、後世の付けくわえであるという議論がこれまでにあった。たとえばロベール・ラフォンはそのゆえにCのテキストだけを翻刻している（p. 82）。またベルトラミなどは苦しまぎれに、第5・6詩節を入れ換えてみれば、意味が通じるなどと示唆していた（pp. 82-83）。だが M^{h2} が、由緒の正しい、13世紀のミケル本の忠実な書写ということで、この面から疑問を呈する必要はなくなったといえよう。C写本は、第7詩節の「兄弟」「姉妹」を難解とみなし、また第8詩節は、夏より冬を好むという第1詩節に矛盾すると考えて、これらを捨てたのであろうか。

そもそも脚韻の構造をみれば、Cよりeのテキストのほうが優秀なことはあきらかである。この作品は、各詩節前半 abba の韻が *-itz*, *-or* を2詩節ごとに繰り返しているのであり（*strophes alternées* と *rims singulares* の折衷形式）、ここに I=II=V=VI, III=IV=VII=VIII という対照を見てとるべきであろう。第8詩節までを一作品とみなしたいゆえんである。

Ⅲ. アベラールとエロイーズの伝説

この詩に接して、語り手はかつて自分の嘗めた不幸なできごとを暗示している、とみるのに異論はあるまい。当時の抒情詩のスタイルとはなんとなく違う。従来から問題にされてきたのはとくに、常套を破って冬が好きだという第1詩節、第6詩節全体、そして第7詩節45-46行の「兄弟」「姉妹」の部分である。しかし、いうまでもなく、これらの難解な詩行を解釈するには、全体の文脈をとらえる必要があるだろう。私なりに疑問点を整理すると、

- 1) あちこちで暗示されている過去のできごととは何か。

- 2) 「私とその忠告を聞いた人」(v. 22) とは誰か。
- 3) 話者の滞在したいという「あそこ」(v. 28) とはどこか。
- 4) 「中傷屋」(「おべっかつかい」)(v. 30) とは誰か。
- 5) 第6詩節全体(これを *aventure nocturne* と呼ぶ研究者もいる)は何をさすのか。
- 6) 「兄弟」「姉妹」(v. 45-46) とは誰をさすのか。
- 7) 「馬鹿げた重荷」(v. 56) とは何をさすのか。

といったところになる。これらを解決しなくては、この作品は理解できない。全体に見られる調子はどうか。過去の特定の事件から立ち直った自分をうたって、ふつうのトルバドゥールの詩とは、かなり異なる雰囲気とはなっていないだろうか。「あの苦悶」(v. 19) とか「襲われたあの夜」(v. 39) などと、自分から遠くなった過去のことを、思わせぶりにほめかしている。それと対比して、「いまは」という語が4回も出てくる(v. 8, 12, 19, 26)。わざと、聞き手にそれと名ざすことなしに、わかってもらおうとしているという印象をぬぐいきれない。私はこの文脈に接してすぐに、エロイズとの狂恋をふりかえるアベラールの心境を詠んでいるのだな、と感じた。ところが、このような解釈を試みた例は(私の知るかぎり)存在しないのである。

18世紀の碩学、サント＝パレによれば、詩人が冒頭で、夏より冬のほうがいと歌っているのは、冬になると愛する奥方が戻ってきてくれるからだ、となる⁽⁸⁾。その延長上に19世紀初めのドイツもあって、語り手は恋の試練に耐えて、ついに恋の充足を得て幸せになった、ととる⁽⁹⁾。他方、最初の校訂版を問うたシュティミングになると、夏より冬のほうがいいなどと、ひねくれた物言いから始めるこの詩人の恋はすでに終わった、これは、彼の危禍を語った作品だと解する。しかし、と留保をつけて、「詩人は自分の身にふりかかった事件について、じゅうぶん明快に説明していない」と指摘する(pp. 7-8)。ここで、はじめて問題の所在があきらかにされた。ガストン・パリスはこれを受けて、現実にあった女難を苦渋をもって回想する作者の、奇妙で難解な処女作とする(p. 528, n.1)。20世紀に入って、ジャンロワ(1915)は、その校訂のなかで問題点を回避し(「きわめてわかりにくいほめかし」(p. v) とのみいう)、1934年には、「不器用ではあるが、最初の《難解詩》*poésie hermétique* の試みには違いない。それでもその目的を達しているのは、作品の意味と作者の意図について、われわれが困惑したままでいるしかないからである」などと述べて解釈を放棄している(t. II, p. 20)。またシェルトゥコ(1940)のようにマルカブリュの影響を論じたり、デル・モンテ(1955)のごとく夢という観点からとりあげたり、といった部分的な解釈は存在したものの、この詩をどうとらえるか、という問題を正面から論じるようになるのは、1960年代からである。1966年に、ストーンはこれまでの研究をまとめてから、冬という季節と喜びが同一視されているのは、諦めの境地をうたっているからではなく、夏という季節のしめす愛の狂気にうち勝ったからだとする(pp. 137-144)。これは幸と不幸の、いわば自己克服という解釈といえよう。もし私の印象どおり、アベラールの心境と考えるなら、

強制された（つまり émasculer された）自己克服ということで、このストーンの見解が正しいことになる。だが、これらはいずれも第1詩節からの見方で、そのあとの不分明な詩行を解決しなくては、最初のこの詩節をいかに見てよいかわからない。

1970年以後の研究を概観しておこう。さまざまな角度からのアプローチがなされているが、なかでもベルトラミ（1978-1979）の論考は、それまでの解釈史を紹介したうえに、みずからこの詩について校訂をほどこすという意欲的なもので、まず第一に参照すべき業績である。すでに1966年にルフェーヴルは、この作品を「改心の歌」（*chanson de la Conversion*）としてとらえて、13-14, 33-35行などにみられる格言風のいいまわしに注目し、ジャウフレ・リュデルを、モラルを説く詩人と評している。そして、俗語の抒情詩に、倫理性と霊的生活についての考察というあたらしいモチーフをもちこんだ、と結論づけていた。このような詩人改心説は、私も方向として正しいと考える。ただ、これを肯定するにせよ否定するにせよ、話者に称揚されている「至純の愛」*fin'amor* (v. 35) をいかにとらえるかで、論点が分かれるように思われる。

トプスフィールド（1970）は指摘する。マルカブリユの「葉がくるくるとまわって」（PC, 293-38）に、夏よりも冬のほうが官能の欲望を吹きはらってくれるから好きだ、という詩句があるから、ジャウフレ・リュデルのこの作品と関連があるに違いない（*Mais pretz lo freich temporeu / que l'estiu plen de gandill / don nais puti'et enveia*。「私は寒い季節のほうを評価する、放縦や嫉妬の生まれる源泉に満ちた夏よりも」vv. 5-7, éd., Dejeanne, p. 184）と。さらに、おなじマルカブリユの「季節が緑に染まるまえに」（PC, 293-7）や「雅びなかたちで始めたい」（PC, 293-15）とのモチーフの類似をも検討し、とくに後者の反歌が、聖地にいる詩人にささげられていることに着目する（「この詩句とメロディーを、海のかなたにいるジャウフレ・リュデル殿におくりたい、そしてフランス人がそれを聞いて心をなごませんことを」（vv. 37-40））。近くにいる相手と官能の愛におぼれて苦しんだあと、詩人が穏やかにはぐくむのは、「遠い愛」*amors de lonh* であつたと。トルバドゥールの説く「至純の愛」は、ルネ・ネリやモシェ・ラザールによって、そのセクシュアルな面、非禁欲性が強調されてきたが⁽¹⁰⁾、ラザール自身最近では、旧約聖書の『雅歌』との関連から、神との愛をさす例を指摘している⁽¹¹⁾。私はこれを、宗教的な文脈でとることは可能だと思っている。

いっぽうスコールプ（1984）は、それまでの評釈を語学的に子細に検討したあと、詩人の愛は、それに「至純の」といった形容がついてもつかなくても、つねにおなじであり、それは結局、世俗の、地上的な愛にほかならないという。詩人はたんにそれに復帰したにすぎない、とみる（p. 83）。マルカブリユにとってもジャウフレにとっても、愛はひとつであり、それから幸福な経験の得られなかった前者は、ひとえにそれを悪とみなし、後者は、それを善と考える。たしかに詩人はこのなかで、辛い体験を「愛」と呼んではいない。v. 32とv. 35にしるされる愛は同一のものをさしている。

社会学的な考察からこの詩を解釈したものとしては、ケーラー（1978）のあとを受け、その方法論を批判しつつも、それを展開したメネゲッティをあげなくてはならない。プライユの小貴族の抱いたであろう反宮廷風恋愛観である。雅びな忠告者たち（v. 22 = v. 45 *faire*）が彼に禁じた愛、すなわちこの詩で語られるグロテスクなエピソードの原因となった官能の愛を強調して、このあたらしい、宮廷風恋愛というイデオロギーにしたがわない女性である「姉妹」は、語り手に再度喜びをあたえてくれようとしている（v. 46）という。大貴族のあいだで勝利をおさめつつある宮廷風恋愛の現実に対抗しよう望む、ジャウフレの《階級意識》をここに認めることが可能だというわけである（pp. 159-160）。

このようにさまざまの読みかたが提出されてきたなかで、ジョゼフのジャウフレ・リュデル不能説（1993）は異色である。この作品を戯画化した教訓説話ととらえ、「恋愛とはひつきょう相手をだますゲームにほかならず、苦しみの源になるのがわかりましたか、よろしい、それなら私のように去勢されてみなさい、皆さん労苦から解放されますよ」、というメッセージだという。その傍証としてジョゼフは、ラインバウト・ダウレンガの「長いあいだ私は隠してきた」（PC,389-31）をあげる。自分はもう男ではないから、世の殿方よ、奥方について心配する必要はない、といったざれごとを友人の騎士たちに自慢する作品（*vanto, gap* などといわれる）である⁽¹²⁾。しかしこれは、ジャウフレの作品とはだいぶ雰囲気異なる、というのが私の印象である。「男の享楽にもっとも資する部分を失い自分はたいへん恥ずかしい、誰がそれを私から奪ったかは、敢えていわない」（vv. 8-10）。「すぐに助けてあげたい、すべての夫たちを、その苦しみ *pantais* や悲しみや憂いから」（vv. 15-17）。「だから五体満足な奥方は私を一銭にも評価しようとしなさい」（vv. 35-36）。こういった調子である。ジャン＝シャルル・ユシェが、1987年にジャウフレの作品を、去勢される男性の恐怖をあらわすとして、ジャウフレの作品に関連させていたが（想像力を拡大させるのなら、なぜアベラールの被った不幸を想起しないのか、と冗談半分に述べている（p. 135））、castrationのテーマの当時存在したという証言にはなるにしても、もちろんラインバウトの作品のほうが後であるし（1170年とされる）、直接の影響関係は考えられないと思う。

ジョゼフ氏の論考は、1993年の第4回国際オック語文学会での発表をもとにしたものだが、これにはじつは私も出席していた。とくにイタリア人女性研究者たちの掣蹙を買い、思いつきにすぎないと攻撃されていた記憶がある。中世詩の解釈に精神分析の方法を多用するユシェなどを引用し、文献的操作の不十分な点が反発をひきおこしたのかもしれない。そのさい、現在ハノーファーのライブニッツ・アルヒーフの研究員である友人のマルテ・バビン氏に、この詩はアベラールの話とはとれないだろうか、と尋ねたところ、僕もそう思うと氏は答えられた。これに意を強くして、以下の論を進めてみたい。

まず年代上の検証である。ピエール・アベラール（ペトルス・アベラルドゥス）は1079年にナ

ントに近いパレに生まれ、1110年ころにパリに出た。1113年にランのアンセルムスについて学び、哲学教師として名声を得て、教え子のエロイズと懇ろになり、子供を設けて秘かに結婚、彼女をアルジャントウイユの修道院に入れた。怒ったその伯父フルベールのさしがねで「災厄」にあったのが1117-1118年ころである。三位一体にかんする彼の理論がソワツソンの教会会議で誤謬と断定され、著書焼却の憂き目にあう。1132年ころに第一書簡といわれる、友人への手紙『災厄の記』 *Historia calamitatum* が書かれる。1140年にはサンスの教会会議でクレルヴォーのベルナルドゥスに著作を断罪されるが、クリュニーの修道院長ペトルス・ウエネラビリスのとりなしてベルナルドゥスと和解し、1142年に病没した。修道院長は遺骸を、エロイズのいる「慰める者」・「守護者」とか「聖霊」を意味するパラクレトゥス（パラクレ）Paracletusの修道院に移送し、アベラルの希望どおりそこに埋葬したという。エロイズとやりとりした手紙を『災厄の記』に付加した往復の『書簡集』が今日みるような形でまとまったのは、のちの13世紀中頃になるらしいが、写本の伝承の統一性からみて12世紀の中葉にはすでにこの書簡集は流通していたとみられる⁽¹³⁾。ジャウフレ・リュデルが当時有名になったはずのアベラルの災厄を、この書簡からであれ、噂としてであれ、聞き知っていたということは、年代的には十分ありうるだろう。

問題は、俗語で詩をものしていたブライユの小貴族のジャウフレ・リュデルが、ラテン語の著作しか残さなかった神学者の災難を、メロディー（残ってはいない）のついた抒情詩にモチーフとして織りこむようなことがありうるのか、ということである。

1972年に開かれたアベラルとペトルス・ウエネラビリスにかんするコロックのなかで、パイヤンは13世紀末に完成したらしいジャン・ド・マンによる『書簡集』の仏訳以前に、俗語でのアベラルの痕跡は発見できないと述べている⁽¹⁴⁾。これまでの、アベラルと俗語文学の比較は、アベラルの神学上の教説に類似したモチーフを探すという、印象批評的な指摘にとどまってきた。ハント（1977）はアベラルの教義に照らして、ベルールによるトリスタン物語のいくつかの主題を分析している。パイヤンのこの発表でも、「至純の愛」とアベラルの *intentio* 重視の神学（行為自体の善悪ではなく、その意図のよしあしを重視する）を対照し、シャトラン・ド・クーシーの「私の愚かな行為に許しを願いながら」（RS, 671; Linker, 38-10）の第4詩節：

S'ainc fins amans ot de mesfait pardon,
 Dont m'i devoit amour bon lieu tenir,
 Quar je fourfis en bone entention
 Et bien cuidai que me deüst merir; (ed., Lerond, p. 83)
 至純の恋人が かつて失敗の許しを得たのなら
 愛は私に上席を あたえて当然だろう
 なぜなら私は 良い意図のもとに悪いことをしたのだから

じっさい報酬をもらっても おかしくないと思った

を、アベラールの議論、「罪」peccatumは「悪い意図」intentio malaのあるなしによる、に同一だという。しかし結局のところ、こうした指摘は表現の類似性のたんなる比較に終わるのではないか。パイアン自身認めるように、「あたらしい心理学とより洗練された文化によって、12世紀にひろまった責任論の概念をおなじくする」(pp. 515-516)と一般化するにとどまっている。

『書簡集』そのものの信憑性については、昔から議論があった。モンフランは1972年のコロックで、19世紀以来の論争をまとめてから、その『災厄の記』校訂の解説を補足している。そこでは、書簡集が、バラクレの修道院でたぶんエロイーズによって一本にまとめられたという仮説を再確認し、エロイーズの人間性が中世の宮廷風文学のヒロインそのものであることを、ディ伯夫人の詩とか、聖地に十字軍のため出発した恋人をなげく女性の詩と関連づけている⁽¹⁵⁾。これは、ふたりの愛にプラトニックな部分がなく、あまりに「現実的」すぎるので、当時の志向とあわず、それがために俗語作品には影響がなかったのではないか、というシャリエの見解に対立する⁽¹⁶⁾。たとえ、ジャン・ド・マン(1290年ころと推定される書簡の仏訳と『ばら物語』vv. 8729-8802, éd. Lecoy)以前に俗語のなかで確たる証言が見つからないにしても、当時の想像力に、かれらの恋愛が何ら影響をおよぼさなかったとは、私には考えにくい⁽¹⁷⁾。とくにフェルベールによる暴行はジルソンのことばを借りれば、「まさにその特殊性ゆえに世間の注意を引かずにはいなかった⁽¹⁸⁾」のである。この事件は、『災厄の記』以前にロスケリヌスによって「ダンからベエルシバまで(『士師記』20-1)」知られていたと書かれているし⁽¹⁹⁾、フーク・ド・ドゥイユ、ウォルター・マップ、などさまざまな作家の書簡や作品に登場してくる⁽²⁰⁾。

さらに忘れてはならないのは、アベラール自身も神学者であるだけでなく、詩人でもあったということである。残っているのは、彼の作として確実なものに限っても、「災厄」ののちにしるした「聖歌」hymnus 3篇、「続唱」sequentia、「哀歌」planctus 6篇である。以前の詩作については、友人にあてた第一書簡にアベラールはこう述べる：

et si qua invenire liceret, carmina essent amatoria, non philosophie secreta; quorum etiam carminum pleraque adhuc in multis, sicut et ipse nosti, frequentantur et decantantur regionibus, ab his maxime quos vita similis oblectat. (éd., Monfrin, l. 354-359, p. 73, cf. trad. de Jean de Meun, éd., Hicks, l. 320-324)

そしてたとえ〔私に〕何か作品がつかれるにしても、それは哲学の神秘についてではなく、愛についての詩であった。これらの詩の大部分は、貴君もよく知るとおり、今でもなお多くの地方で繰り返し歌われ、主に同じような感情に魅せられている人々に愛唱されている。

また第二書簡でエロイーズが述べる：

Duo autem, fateor, tibi specialiter inerant quibus feminarum quarumlibet animos statim allicere poterat, dictandi videlicet et cantandi gratia, que ceteros minime philosophos assequutos esse novimus. Quibus quidem, quasi ludo quodam laborem exercitii recreans philosophici, pleraque amatorio *metro vel rithmo composita* reliquisti carmina, que pre nimia suavitate tam dictaminis quam cantus sepius frequentata tuum in ore omnium nomen incessanter tenebant, ut illiteratos etiam melodie dulcedo tui femine suspirabant. Et cum horum pars maxima carminum nostros decantaret amores, multis me regionibus brevi tempore nunciavit et multarum in me feminarum accendit invidiam. (éd., Monfrin, l. 194-206, p. 115, cf. éd., Hicks, p. 51, l. 205-217)

正直に言いますと、あなたはどのような女性の心をもすぐに魅了できるふたつの要素をとくにもっておられました。すなわち作詩する才能と作曲する才能です。これらは、他の哲学者たちの誰もけっして獲得できなかったのは、よくわかります。このふたつによってあなたは、学問研究による疲労を、いわば慰めでもって癒されて、そしてたくさんの愛の詩を韻律をつけるか、あるいは脚韻を踏むかして作られ、あとに残したのです。これらは歌詞とメロディーのたぐいまれな甘美さのゆえに、いつも人々に歌われ、あなたの名前を万人の口の端にたえずのぼせていました。文盲の人さえが、旋律の甘美さのために、あなたを忘れようとしても忘れられなかったのです。女性たちがあなたに憧れてため息をついていたのも主としてこの理由です。そして、これらの歌の大部分は、私たちの愛を歌っていましたから、私は短時日のうちに多くの地方に知れわたり、多くの女性の嫉妬心をかきたてました。(強調は筆者による)

またおなじく：

Cum me ad turpes olim voluptates expeteres, crebris me epistolis visitabas, frequenti carmine tuam in ore omnium Heloysam ponebas; me platee omnes, me domus singule resonabant. (éd., Monfrin, l. 269-272, p. 117, cf. éd., Hicks, p. 53, l. 282-285)

かつて私を望んで卑しい愛欲に向けさせておいでになったころ、あなたは私を何度なく手紙で尋ねては、数々の歌をとおして、あなたのエロイーズの名をすべての人々の口にのぼせてくださいました。あらゆる街、すべての家に私の名が響きわたりました。

これを読めば、アベラールがトルバドゥールとして詩とメロディーを作っていたと考えたくなるのも無理はない。作っていたのは事実にしても、それは現存の「哀歌」に似た形式で、ラテン語

によるに違いないと断じるラビーのような研究者もいる（ここで、残した詩が *metro vel ritmo composita* とあるのに注意されたい（ジャン・ド・マンの仏訳では、*fais par vers ou par rimes*）。韻律的なものはラテン語詩に限定されるだろうが、律動的な詩は俗語である可能性もある）。『カルミナ・ブラーナ』の第169歌（ed., Schumann）などいくつかの現存のラテン語詩のなかで作者をアベラールに擬する向きもある⁽²¹⁾。またズムトールのように、ゴリアール詩人・放浪聖職者の限られた環境のなかでだけふたりの愛が有名であった可能性を認めながらも、オック語圏とオイル語圏の境界に生まれた、「ジャウフレ・リュデルの同時代人である」アベラールが、ロワール河以北にトルバドゥールの「至純の愛」を紹介した人物だったのではないかと大胆な仮定を立てる人もいる⁽²²⁾。いずれも証明不可能な推測ではある。

パスカル・プールガンによれば、韻律的だったギリシア・ラテンの古典詩が、しだいに律動的というべきか、音綴数を基調にした脚韻の詩に変容していくにしたがって、12世紀の中葉から一詩人・一流派でまとめる冊子 *libellus* が、カイエごとになっていくという。そして、アベラールの「哀歌」がフランドルの一写本（Roma, Vat. lat. 4389）中の最後に1カイエとして付せられていて、それには続けてメロディーもするされているという⁽²³⁾。してみると、ラテン語と俗語の垣根は、絶対的なものではなかったことになる。ジャウフレ・リュデルの作品に戻って吟味することにしよう。

IV. 《夜中のアヴァンチュール》／「兄弟」と「姉妹」

第6詩節の *aventure nocturne* はアッペルをして、これほど難解な詩句の注釈を誰が試みようとするだろうか（p. 348）、と言わしめた部分である。ここをアベラールの災厄ととらなければあい、恋人と密会の最中を襲われて、恥をかかされた体験を後悔している、とみるしかない。シュティミングは、語り手を襲撃したのは当のゲームの手引きによるのではないかという。この美人局説を嗤うシュピッツァーとなると、「自分の恋人と着物をつけたままベッドで横になっている方が、裸で他の女性と寝るよりもよい」という抒情詩のモチーフの一変形を vv. 36-37に見て、押し込み強盗説を唱える。突如襲われ衣服を奪われ、あろうことか、嘲笑された主人公は、快楽を味わうよりは着物をつけたまま寝ている方が利口であった、と回想するという！

ルフューヴルは、より漠然と、恋人のもとから裸で逃亡するはめになった「かなり通俗喜劇的」*assez vaudevillesque* な経験とみる（p. 178）。したがって、前行の「至純の愛は人をけっして裏切らない」（v. 35）という格言は作者による皮肉であると。さらにラザールは、これをまるでファブリオの題材のようだとし、想像をたくましくする：「詩人はある夜のこと、自分のゲームの横に、掛け物の下で服をぬいでいる状態のもとで不意打ちをくらう。激しく叩かれて遁走せざるをえなかった。（……）詩人はしたがって不幸な冒険から逃れたばかりなのだ。危険すぎる愛から逃げたのである。だから56行で《やっと重荷をおろした》と嘆息まじりにいうとき、

それは靈的な改心でも、世俗の愛の放棄でも断じてなく、自主的な愛の回復にほかならない。一緒にいると苦しみに喘がなくてはならない女性から彼は自由になった。あたらしい愛を見つけたのであろう」(pp. 90-93)。テキストを読めばわかることだが、語り手が女性と一緒にいるとも、殴られたとも書かれてはいない。

私はここを、ぬくぬくと世俗の生活を送りベッドで女性と楽しんでいるよりは、修道僧の生活に入っているほうがよい(よかった)、と単純にとりたい。着物をつけたまま横になる(眠る)というのは修道院の規則だからである。『聖ベネディクトゥスの戒律』には「修道士は着衣したまま、ベルトまたは紐を締めて寝ること」*Vestiti dormiant et cincti cingulis aut funibus*,⁽²⁴⁾とある。もちろんアベラールは、事件ののちにサン・ドニの修道院において修道士となるのであった。

さて第7詩節、ジャンロワが、「45-46行がなにを暗示しているか私にはまったく不明であった」(1915, p. 5, n. 1)と述べた詩句を検討しよう。そもそも「兄弟」「姉妹」は、宗教上の文脈できわめて頻繁に用いられる。『書簡集』でも、何回となくアベラールとエロイズは互いにそのように呼びあっていた。しかし「兄弟」の拒むことが「姉妹」により許される、とはどういうことだろうか。『災厄の記』の助けを借りてみる。アベラールは、アルジャントゥイユの修道院を追い出されたエロイズとそれに従う数名の修道女のために、かつて自分の名づけたパラクレトゥスの礼拝堂をあたえた。サン・ジルダ・ド・リュイス(ブルターニュのヴァンス司教区)の修道院長として赴任したあと、放置されていたからである。第一書簡のこの部分はジャン・ド・マンの訳によるとこうなる：

Et come je fusse ore plus en greigneur torment par la persecucion de mes filz que ne n'avoye jadiz esté par cele de mes freres, je avoye ordené que je m'en recourusse a ces sereurs de l'ardeur de ceste tempeste, aussy come a ung port de pais et de repos, et peusse ung pou illec reposer et m'alaine reprendre, (...) ⁽²⁵⁾.

それにそのころ私は、かつて私の兄弟たちから受けた迫害よりもっと大きな迫害を私の息子たちから受けて苦しんでいたので、この激しい嵐を逃れてあたかも平和な休息の港へでも避難するかのよう、あの姉妹たちのところへ赴き、そしてそこでわずかに憩い、息づこうと手はずを整えていた。

「兄弟たち」とは、サン・ドニの修道院で同僚だった修道士たちで、「息子たち」とは、サン・ジルダの修道院での部下たちである。ジャウフレの原文では、*lo fraire, la seror*と定冠詞の単数であったが、これは総称としてとらえることにして、「息子たち」も含む) 男の修道士たちに拒まれて、ゆっくり休息をとりたいというアベラールの心情は、エロイズのいるパラクレトゥスで受けいられる、というように理解できないだろうか。ジルソンは『災厄の記』のこのくんだり

について述べている：「サン・ジルダ以外の修道院長も隠れ家をもたぬ女子修道院長とその配下の修道女のために避難所を探すことはありえたであろう。しかしそれをエロイズのためにしたのはアベラールだったのだ。まさに彼が夫であり彼女が妻であったがゆえに。巡るすべての土地から追放され放浪にあるアベラールは、このパラクレで生涯を終えることをひととき夢みた⁽²⁶⁾」。

また、第五書簡の祈りのことばの前でアベラールはエロイズに語る：

Dont nous nous fions plus de t'aide envers lui pour nous, que je acquiere par t'oroison ce que je ne puis par la moye propre, et mesmement ore, quant le continuel enchaucement de peril et de turbacion ne me laisse vivre ne entendre a oroison, (...) ⁽²⁷⁾.

だからわれわれは、あなたの援助をさらに頼りたいのだ、われらのために主にとりなしてくれることを。そうすれば私自身の祈りによっては得られないことを、あなたの祈りによって得ることができるであろう、とくに私が毎日絶えず危険と艱難に悩まされていて、生活する余裕も祈りをおこなう余裕もない現在においては (...).

以上の例より、第7詩節ぜんたいの意味は、つぎのようにとらえられないだろうか。もはや世俗の世界を捨てた語り手が、しばしの休息を「姉妹」のもとでまた得られるかもしれないという希望をもつ。まさかもう夜のアヴァンチュールでもあるまいが、彼女の所へ行けば、人からまた中傷されるかもしれない、それを期待する自分が多少とも不安ではある。しかし分別を完璧にそなえた人間などどこにもいないのだから、許されるのではあるまいか、と。主人公は一種ひらきなおりのようなものを吐露していることになる。「書簡集」にはあらわれない、アベラールの弱気な一面をもしめして、事件の顛末の、俗語によるいわば抒情詩的なとらえかたといつてよい。

この解釈が当を得ているかどうかはわからない。だから断定などできないのだが、これまでの仮説は、多種多様きわまりなく、この詩行については率直にいて、思いつきの大博覧会である。この説を加えてもさほど問題はあまい。ナイクルは、主人公のかつてひどいめにあったその女性が「姉妹」にほかならず、彼を殴ったのはその「兄弟」であるとする (p. 258)。この延長上でラザールは考える。「姉妹」とは、語り手のあらたな恋人なのであって、その「兄」は自分の「妹」によくも手を出したな、と怒って喧嘩になるのだと。しかし、繰り返していうが、争いとか殴りあいなど、テキストのどこにも存在しないのである。このような即物的な解釈ではなく、なんらかの象徴ととらえる人々は、「兄弟」をキリスト、「姉妹」をマリアにとってミスティックな愛を見たり (アッペル、ロバートスン)、「至純の愛」と「虚偽の愛」 *fals'amor* の対立をもちだし、「アダム」と「エヴァ」の存在を見たり (デノミ)、「兄弟」を荒々しい騎士の愛、「姉妹」を宮廷風の洗練された恋愛のシンボルだとする (カゼツラ、ポルマン、ムルク)。これによると、前者に拒まれ、後者に許されるというのは、語り手の価値が回復する可能性をしめすという (マ

ジョラノ)。父親の不賛成だったものを母親の愛が認めてくれる、とみる精神分析風解釈まである(チョレイキアン)。たんなる「兄弟」「姉妹」が、なぜこのように拡大解釈されるのか理解に苦しむ。さらにシュピッツァーは「いっぽうは、他方は」をしめすたんなるいいまわしととり、「好きな女が私に拒否するものを、他の女性が私に認めてくれる。据膳食わぬは男の恥、はてさて私は困惑の体である」と解した。このような文法派のなかには、聞き手がすでに知っている男女をしめす代名詞のことだとするメネゲッティがいる。男(兄弟)とは、友人でジャウフレを高雅な宮廷風恋愛に導いてくれた「良き忠告者たち」(v. 22-23)を、女(姉妹)とは、地上の恋愛の相手であるゲーム、恋人に快樂をあたえるに躊躇しない女性をさすという。

これまで提出されてきた解釈はすべて説得性に欠ける、と喝破するキアリニの提案するのは、奇矯な解釈の極ともいうべきものである。男女の性別をまったく無視して「昼」と「夜」の対立ととらえ、「遠い恋」の緊張が詩人の生活をつねに占めていて、夜(姉妹)だけが夢のなかで、彼の生に(いつわりであるにせよ)幸福感に浸るのを許してくれる、と解する。おなじく珍説とすべきか、トプスフィールドやローゼンシュタインの示唆するのは、中世の錬金術のなかで、人格を構成するふたつの部分をさすという可能性である。

このように、即物的解釈説、象徴説、文法的道具説、錬金術説など入り乱れて主張されるなかで私の解釈は、修道士アベラール説とでも呼ぼうか。いずれにしても、ジャウフレ・リュデルのほかの作品にも通底する「遠い愛」のモチーフが、ここにも現れているのは事実である。それが、いまや互いに修道院に入る身となって、現世では会いまみえることのなくなったアベラールとエロイズの心情に重ねあわされているのではないだろうか。最終行の「重荷」について、ジャン・ド・マンの筆で最後に引用しておこう：

Car cil qui ont pitié du dolent et duel, li seulent confort apporter, et *chascun fés*, quant il est mis sus plusieurs, si est plus legierement soustenus ou portéz.⁽²⁸⁾

哀しみや苦しみは、それを一緒に苦しんでくれる者がいればよほど慰めになるのがつねですし、どのような重荷でも、多くの人々のうえに置かれたときには、支えるにも運ぶにも軽くなります。

エロイズがアベラールの苦境を知って書き送った第二書簡である。ジャン・ド・マンの仏訳を伝えるのは、唯一の写本(B. N. F., fr. 920)であるが、エロイズのいるパラクレトゥスの僧院は、その第一部(第七書簡まで)では一貫して、*paraclit* となるはずを *paradiz* と誤記されているという⁽²⁹⁾。ふたりの愛の伝説がここでまた伝説を生んだ。14世紀末の写字生(ばら物語論争で著名なゴンチェ・コルとされる)は、この世でふたたびめぐりあえない女性の住まう「あそこ」、「彼の地」(v. 28)を、天国としてとらえていたことになる。

注

- (1) ジャウフレ・リュデルの校訂とその問題点については、ここでは詳しく論じることができない。1991年までの、その全体的な素描を得るには：Maria Luisa MENEGHETTI, «De l'art d'éditer Jaufre Rudel», in *Cahiers de civilisation médiévale*, t. XXXIV, 1991, pp. 167-175. が便利であろう。
- (2) この作品は、その難解のゆえか、アンソロジーにはほとんど収録されない。これを入れたのは、私の知るかぎり、François-Juste-Marie RAYNOUARD, *Choix des poésies originales des troubadours*, Paris, Firmin-Didot, 1816-1821, 6 vols, t. III, pp. 85-97. [C写本によっているため第6詩節まで] と、それをそのまま掲載した C.A.F. MAHN, *Die Werke der Troubadours*, Berlin, Dümmler, 1846-1886, 4 vols, t.I, pp. 63-64. そして独自の方針をもって編集された詞華集 Gherardo MARONE, *Trovadores y juglares, Antología de textos medievales con tracucción, comentarios y glosario, I*, Buenos Aires, Instituto de Literatura, 1948, pp. 79-82. のみである。
- (3) cf. Ed., Véronique RONCORONI-ARLETTAZ, *Gioacchino Plà, Poesie provenzali, tradotte in lingua italiana, édition du manuscrit Vat., Barb. lat. 3965*, Université de Lausanne, 1991; JEANROY, p.23; PC, p.xxvii; BRUNEL, no. 331.
- (4) 詳細については、François ZUFFEREY, *Recherches linguistiques sur les chansonniers provençaux*, Genève, Droz, 1987, pp. 157-168. を参照されたい。ズユフレは、現存しないこの詞華集全体を b と名づけることを提案している。
- (5) Maria CARERI, «A la ricerca del libro perduto: un doppio e il suo modello ritrovato», in *Lyrique romane médiévale: la tradition des chansonniers, actes du colloque de Liège, 1989*, Université de Liège, 1991, pp. 329-378. なお M^{h2} という記号は、Madrid の歴史 (de la Historia) 図書館に存在する 2冊目のオック語抒情詩写本という意味であろう。
- (6) Maria CARERI, «Jaufre Rudel nel "libre" di Miquel de la Tor», in *Contacts de langues, de civilisations et intertextualité, III^e congrès international de l'AIEO, t.II*, 1990, pp. 607-625.
- (7) *art. cité*, pp. 617-618 et V. RONCORONI-ARLETTAZ, *op. cit.*, pp.196-199.
- (8) Lacurne de SAINTE-PALAYE [et l'abbé MILLOT], *Histoire littéraire des troubadours*, Paris, Durand neveu, 3 vols., 1774, t.I, p.91.
- (9) Friedrich DIEZ, *Leben und werke der Troubadours*, Zwickau, Schumann, 1829, p.57.
- (10) René NELLI, *L'érotique des troubadours*, Toulouse, Privat, 1963; Moshé LAZAR, *Amour courtois et "fin'amors" dans la littérature du XII^e siècle*, Paris, Klincksieck, 1964.
- (11) Moshé LAZAR, «Fin'amor», in éd., E.R.P. AKEHURST et Judith M. DAVIS, *A Handbook of the Troubadours*, University of California Press, 1995, pp.61-100, surtout pp.90-97.
- (12) Ed., PATTISON, no.XXVIII, pp.164-167. cf. Martin DE RIQUER, no.LXXIV, t.I, pp. 442-444; Jacques ROUBAUD, *Les Troubadours*, Paris, Seghers, 1971, pp. 152-155.
- (13) Ed., Jacques MONFRIN, *Historia calamitatum, texte critique avec une introduction*, Paris, J. Vrin, 1959, p.60. この書簡集については、尨大な研究史がある。とりあえずは、モンフランのこの校訂の、ゆきとどいた序文を参照していただきたい。
- (14) Jean-Charles PAYEN, «La pensée d'Abélard et les textes romans du XII^e siècle», in *Pierre Abélard, Pierre le Vénérable — Les courants philosophiques, littéraires et artistiques en Occident au milieu du XII^e siècle (Abbaye de Cluny, 2-9 juillet 1972)*, Paris, CNRS, 1975, pp. 513-520 (p. 513) [この発表のあとの質疑応答のなかで、ミシエル・ザンクが、Arsenal 2058 という13世紀前半の写本に、俗語の引用の雑纂があり、それにアベラールの説教の引用が2つ存在すると指摘している。貴族の女性のためにまとめられたらしい]; Tony HUNT, «Abelardian Ethics and Beroul's Tristan», in *Romania*, t.XCVIII, 1977, pp.501-540; J.-Ch. PAYEN, «Beroul et l'abélardisme», in *Romania*, t.CIII, 1982, pp.374-375.

- (15) Jacques MONFRIN, «Le problème de l'authenticité de la correspondance d'Abélard et d'Héloïse», in *Pierre Abélard, Pierre le Vénérable...*, 1975, pp.409-424.
- (16) Charlotte CHARRIER, *Héloïse dans l'histoire et dans la légende*, Paris, Champion, 1933, pp.368-395.
- (17) フリュートル、ウェストラによる中世文学に登場する固有名詞の辞典を見ても、このふたりの名は見つからない。叙事詩には *Heloy*s なる女性が出てくるが関係はあるまい。トルバドゥールなかには *N'Eloitz* という女性がラインバウト・デ・ヴァケイラスの *carros* と呼ばれる奇想天外な詩に現れる (CHAMBERS, *Proper Names*, p. 114: PC,392-32, v. 49, éd., LINSKILL, pp.204-215)。女性が町を建て、軍隊を作って、たがいに戦うこの作品は、1200年ころと推定されるが、これがあのエロイズのことを念頭においているかどうかはさだかでない。
- (18) Etienne GILSON, *Héloïse et Abélard*, Paris, J.Vrin, 1938, 3^e éd., 1964, p.59 [中村弓子訳「アベラールとエロイズ」、みすず書房、1987年、p.56]。
- (19) Henri DE LUBAC, *Exégèse médiévale, les quatre sens de l'écriture*, Paris, Aubier, 1959-1961, 4 vols, seconde parité, p. 299.
- (20) Folques de Deuil, *P.L.*, t.178, col.374, D: *Pene tota civitas in tuo dolore conabuit*, cf. J. DE GHELLINCK, *L'essor de la littérature latine au XII^e siècle*, Bruxelles, Desclée de Brouwer, 1946, 2^e éd., 1954, p.44 et pp.146-149; Helen WADDEL, *The Wandering Scholars*, London, Constable, 1927, p.198; Max MANITIUS, *Geschichte der lateinischen Literatur des Mittelalters*, Band III, München, C.H.Beck, 1931, 1973, pp.269-270. 古い資料だが、ギゾー全集第24巻、*Abailard et Héloïse, essai historique*, Paris, Didier, 1853. の付録に12世紀以来の、ふたりにかんする証言・逸話 (Otho Episcopus Frisengensis からベトラルカ、エティエンヌ・パーキエまで) がまとまって載せられている。
- (21) cf. F.J.E.RABY, *A History of Secular Latin poetry in the Middle Age*, Oxford, The Clarendon Press, 1934, 2 vols, t.II, p.325; F.A. WRIGHT et T.A. SINCLAIR, *A History of Later Latin Literature*, London, George Routledge, 1931, pp.296-297; Ricardo GARCIA-VILLOSLADA, *La poesia ritmica de los goliardos medievales*, Madrid, Fundacion Universitaria española, 1975, pp.42-54. DE GHELLINCK によれば、アベラールの韻律法は必ずしも正確ではなかったという (*op. cit.*, p. 47)。第169歌 (*Hebet sydus leti visus*) が、エロイズとの愛の顛末を題材にしたという興味深い説にかんしては、Peter DRONKE, *Medieval Latin and the Rise of European Love-Lyric*, Oxford, The Clarendon Press, 1965, 2^e éd., 1968, pp.313-318. を参照。また、ゴリアール詩人としてのアベラールについては、新倉俊一「中世の知識人 アベラールとその後裔たち」が必読の文献である (『ヨーロッパ中世人の世界』、筑摩書房、1983年、pp. 3-36. 所載)。
- (22) Paul ZUMTHOR, *Lamentations*, coll. Babel, no.52, Avignon, Actes Sud,1992, p.12. cf. Michel HUGLO, «Abélard, poète et musicien», in *Cahiers de civilisation médiévale*, t.XXII, 1979, pp.349-361.
- (23) Pascale BOURGAIN, «Les chansonniers lyriques latins», in *Lyrique romane médiévale...* (*op. cit.*), 1991, pp.61-84 (p.73).
- (24) Ed., Philibert SCHMITZ, *Règle de saint Benoît*, Turnhout, Brepols, 1987, p.70.
- (25) Ed., Eric HICKS, *La vie et les épistres, Pierre Abaelart et Heloys sa fame, traduction du XIII^e siècle attribuée à Jean de Meun*, t.I, Paris, Champion, 1991, p.41 (l.1344-1353). この校訂ではラテン語版が見開きでついている (éd., Monfrin, p.105, l.1477-1486). ベッジャートによる校訂はヒックスにより酷評されている (Ed., Fabrizio BEGGIATO, *La lettere di Abelardo ed Eloisa nella traduzione di Jean de Meun*, Modena, Mucchi, 1977, 2vols.). この版によれば、ここは p. 70.
- (26) GILSON, *op. cit.*, p.64 [邦訳, pp. 61-62].
- (27) *op. cit.*, p.86 (l.569-572). cf. éd., BEGGIATO, t. I, p. 140; Maurice de GANDILLAC et Edouard JEAUNEAU, *Entretiens sur la Renaissance du 12^e siècle*, Paris / La Haye, Mouton, 1968, pp.368-369. なお「兄弟」

をフルベールとみなすのは、この伯父が canonicus (éd., Monfrin, 1281-282, p.71) であることから無理だろう。

(28) *op. cit.*, p.46 (1.45-47) (éd., Monfrin, p.112, 1.43-45). cf. éd., BEGGIATO, t. I, p. 79.

(29) Carla BOZZOLO, «L'humaniste Gontier Col et la tradition française des *Lettres d'Abélard et Héloïse*», in *Romania*, t.XCV, 1974, pp.199-215 surtout, p.206. なお「往復書簡」の訳については畠中尚志訳(岩波文庫)を参照した。

書誌 (年代順)

[ジャウフレ・リュデルの作品の校訂] (先行の校訂を利用しただけのものは省いた)

Albert STIMMING, *Der Troubadour Jaufré Rudel, sein Leben und seine Werke*, Kiel, Schwers, 1873.

Alfred JEANROY, *Les chansons de Jaufré Rudel*, coll. C.F.M.A., no.15, Paris, Champion, 1915, 2^e éd., 1924.

Rupert T. PICKENS, *The Songs of Jaufré Rudel*, Toronto, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1978.

Roy ROSENSTEIN, *The Poetry of Jaufré Rudel*, [édition réunie à George Wolf, *The Poetry of Cercamon*,] New York / London, Garland, 1983.

Giorgio CHIARINI, *Il canzoniere di Jaufré Rudel, edizione critica, con introduzione, note e glossario*, L'Aquila, Japadre, 1985.

Robert LAFONT, *Jaufré Rudel: Liriche*, Firenze, Casa Editore Le Lettere, 1992.

[PC, 262-1 にかんする研究]

Carl APPEL, «Wiederum zu Jaufré Rudel», in *Archiv für das Studium der neueren Sprachen und Literaturen*, t. CVII, 1901, pp.338-349.

Gaston PARIS, «Jaufré Rudel», in *Revue historique*, t. LIII, 1893, pp.225-260 [repris dans *Mélanges de littérature du moyen âge*, Paris, Champion, 1912, pp.498-538] .

Alfred JEANROY, *La poésie lyrique des troubadours*, Toulouse, Privat, 1934, 2 vols., t.II, pp.17-23.

Mario CASELLA, «Poesia e storia: II, Jaufré Rudel», in *Archivio storico Italiano*, t.XCVI, 1938, vol.2, pp.153-199 (notamment pp.175-179).

Dimitri SCHELUDKO, «Über die Theorien der Liebe bei den Trobadors», in *Zeitschrift für Romanische Philologie*, t.LX, 1940, pp.191-234 [repris dans Rudolf BAEHR, *Der Provenzalische Minnesang*, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1967, pp.303-361].

Leo SPITZER, *L'amour lointain de Jaufré Rudel et le sens de la poésie des troubadours*, Chapel Hill, 1944 [remanié dans *Romanische Literaturstudien, 1936-56*, Tübingen, Max Niemeyer, 1959, pp.363-417. repris dans *Etudes de style*, Paris, Gallimard, 1970, pp.81-133, voir surtout pp.132-133].

A.J. DENOMY, «Fin'amors: the Pure Love of the Troubadours, its Amorality and Possible Source», in *Mediaeval Studies*, t. VII, 1945, pp.139-207, surtout, pp.157-166.

A.R. NYKL, [c.-r. de Leo Spitzer (1944)] , in *Speculum*, t.XX, 1945, pp.252-258.

D.W. ROBERTSON, Jr. «*Amors de terra lonhdana*», in *Studies in Philology*, t.XLIX, 1952, pp.566-582, surtout pp.578-580.

Leo SPITZER, [*Discussions sur Salvatore SANTANGELO, L'Amore lontano di Jaufré Rudel*, 1953,] in *Romania*, t. LXXV, 1954, pp.396-402.

Alberto DEL MONTE, «*En durmen sobre chevan*», in *Filologia Romanza*, t.II, 1955, pp.140-147 [repris dans

- DEL MONTE, *Civiltà e poesia romanze*, Bari, Adriatica, 1958, pp.60-69].
- Ronald N. WALPOLE, «Jaufre Rudel: Who can open the Book ?», in *Romance Philology*, t.XIII, 1959-1960, pp.429-441.
- Moshé LAZAR, *Amour courtois et "fin'amors" dans la littérature du XII^e siècle*, Paris, Klincksieck, 1964, pp.90-94.
- Donald STONE, Jr., «Rudel's *Belhs m'es l'estius*: A New Reading», in *Neuphilologische Mitteilungen*, t.LXVII, 1966, pp.137-144.
- Yves LEFEVRE, «Jaufré Rudel, professeur de morale», in *Annales du Midi*, t.LXXVIII, 1966, pp.415-422 [repris dans LEFEVRE, *Mélanges de littérature du Moyen Age*, Bordeaux, Bière, 1991, pp.175-182].
- Leo POLLMAN, *Die Liebe in der hochmittelalterlichen Literatur Frankreichs, Versuch einer historischen Phänomenologie*, Frankfurt am Mein, Vittorio Klostermann, 1966, pp.176-179.
- Ulrich MÖLK, *Trobar clus — trobar leu, Studien zur Dichtungstheori der Trobadors*, München, Wilhelm Fink, 1968.
- Leslie T. TOPSFIELD, «"Jois" "amors" and "fin'amors" in the Poetry of Jaufre Rudel», in *Neuphilologische Mitteilungen*, t.LXXI, 1970, pp.277-305.
- id., «Three levels of love in the poetry of the early troubadours, Guilhem IX, Marcabru and Jaufre Rudel», in *Mélanges de philologie romane dédiés à la mémoire de Jean BOUTIERE*, Liège, Soledi, 1971, pp.571-583.
- Matteo MAJORANO, «Lingua e ideologia nel canzoniere di Jaufres Rudels », in *Annali dell'Istituto Universitario Orientale (Sezione romanza) di Napoli*, t.XVI, 1974, pp.159-201.
- Leslie T. TOPSFIELD, *Troubadours and Love*, Cambridge University Press, 1975, pp.42-69 [article remanié de celui de 1970] .
- Erich KÖHLER, «"Amor de lonh", oder: Der "Prinz" ohne Burg», in *Orbis Mediaevalis, Mélanges de langue et de littérature médiévales offerts à Reto R. BEZZOLA*, 1978, pp.219-234.
- Pietro G. BELTRAMI, «La canzone "Belhs m'es l'estius" di Jaufre Rudel», in *Studi mediolatini e volgari*, t.XXVI, 1978-1979, pp.77-105.
- Manuela ALLEGRETTO, *Il luogo dell'amore — studio su Jaufre Rudel*, Firenze, Leo S. Olschki, 1979.
- Maria Luisa MENEGHETTI, «Una vida pericolosa. La "mediazione" biografica e l'interpretazione della poesia di Jaufre Rudel», in *Cultura Neolatina*, t.XL, 1980, pp.145-163.
- Povl SKARUP, «Quelques strophes de Jaufré Rudel dont la syntaxe a été mal interprétée», in *Revue Romane*, t.XIX, 1984, pp.71-84.
- E. Jane BURNS, «The Man behind the Lady in Troubadour Lyric », in *Romance Notes*, t.XXV, 1985, pp.254-270.
- Jean - Charles HUCHET, *L'Amour discourtois — la "fin'amors" chez les premiers troubadours*, Toulouse, Privat, 1987, pp.133-138.
- Rouben C. CHOLAKIAN, *The Troubadour Lyric, A psychological reading*, Munchester University Press, 1990, pp.92-97.
- Sylvain JOSEPH, «*Belhs m'es l'estius* de Jaufré Rudel: contribution à une re-lecture», in *Actes du IV^e congrès international de l'AIEO*, 1993, pp. 147-158.
- Linda PATERSON, «Marcabru's Rhetoric and the Dialectic of *trobar*: "Ans que 'l terminis verdei" (PC 293.7) and Jaufre Rudel», in *Conjunctures : Medieval studies in honor of Douglas KELLY*, Amsterdam, Rodopi, 1994, pp.407-423.